

《研究ノート》

岡山大学所蔵大原農書文庫について

神 立 春 樹

目 次

- 1 岡山大学にとっての大原農業図書館蔵書
- 2 大原農業研究所農業図書館における特殊図書資料類の購入
- 3 大原農書文庫収集書物の概要
- 4 大原農書文庫農書類の特徴
- 5 大原農書文庫の特色ある農書
- 6 大原農業研究所における図書収集の意義

1 岡山大学にとっての大原農業図書館蔵書

1949（昭和24）年に発足した岡山大学は、その設置過程において倉敷市に所在する大原財団の諸施設を設置構想実現の一つの大きな拠としていた。中国総合大学設立期成会の「国立総合大学岡山設置計画書」には、国立総合大学を岡山に設置すべき理由の一つとしに大原財団の文化事業をあげている。すなわち、国立総合大学を岡山に設置すべき理由として、文化的基盤の確立していること、明治以後における教育県としての実績、県民全般の文化水準の高いこと、大原財団の文化事業、の四つをあげている⁽¹⁾。そして、岡山に設置される中国大学は6学部と5研究所からなるが、5研究所のうち農業研究所は現倉敷市大原農業研究所を充当する、美術研究所は現倉敷市大原美術館を充当する、となっている⁽²⁾。岡山大学が設置された後は、この大原農業研究所はその有力な構成部門となることが望まれ、その研究用資産は岡山大学に

無償寄付されることとなり、1951年3月に一部が、ついで1952年4月に残部が移管されて、農学部附属大原研究所として発足した。その後、1953年4月には大学附置研究所に昇格し、岡山大学農業生物研究所となった。⁽³⁾なお、農業生物研究所はその後に資源生物科学研究所に改められて現在にいたっている。

このように岡山大学農業生物研究所は、財団法人大原農業研究所の移管によって成立した。ひきついだもののなかに膨大な図書資料があった。岡山大学への移管終了時の1952（昭和27）年に大原農業研究所は、日本809種、諸外国45カ国800種の雑誌・報告類、洋書7万1257冊、和漢書4万3173冊、合計11万4430冊を擁していた。⁽⁴⁾岡山大学の発足時に、その大きな母体となった旧制第六高等学校の図書室図書は6万4275冊であった。⁽⁵⁾これは1900（明治33）年創設以来の50年間にわたって累積されてきたものである。また、さらに長い歴史をもつ岡山医科大学の後身である医学部の図書館（医学部分館）の1949（昭和24）年の蔵書数は9万8306冊であった。⁽⁶⁾これらと比較するとき一民間研究所である大原農業研究所の11万余冊の蔵書はその数量においてきわめて多かったといえるのである。

ひきついだ図書には、内外の雑誌、自然科学、農学等を中心とする図書のほかに、旧書庫3階に別置されている図書がある。それらのうちにはすでに「特殊文庫」として整理されてきている、Pfeffer文庫、大原漢籍文庫の両文庫があるが、それ以外の一群の和装本類が大原農書文庫として分類整理され、その目録が刊行されている。⁽⁷⁾それまでの二つの文庫とこの大原農書文庫というこの三つの「特殊文庫」が岡山大学大原文庫を構成する。岡山大学は、大原農業研究所からこの大原文庫をひきついだのである。

2 大原農業研究所農業図書館における特殊図書資料類の購入

この蔵書を擁した大原農業研究所農業図書館の創設は1921（大正10）年である。それまでの1,000余冊を移管するとともに、図書蒐集が急速に行なわれた。⁽⁸⁾『財団法人大原奨農会要覧』（1926年）にはつぎのように記されている。1921年に大原孫三郎氏の特別寄付によって図書館が設立された。書庫は31坪3階の煉瓦建で、これに事務室、閲覧室、製本室が附設された。ついで図書の蒐集について、「而して従来購入せる図書の外に大原家よりの特別寄附金によりて農学、生物学、理化学に関する洋書、和漢書を蒐集したり。以て研究員の研究資料となすのみならず又之を開放して一般の閲覧に供して農業の進歩に貢献せんとす」、さらに、「図書蒐集につきて記さば独逸ライプツヒ大学植物学教授プエッファー氏が大正九年に没するや大正十年に同氏遺書一万三千三百五十三冊を纏めて購入したり。次に山口弥輔氏が大正十一年より大正十三年まで独逸に在りて莫大の図書を蒐集せり。又大正十二年に松本圭一、西門義一の両氏支那に渡りて農業に関する漢書を蒐集したり。右の外随時購入せる図書も亦尠からず」、1926（大正15）年3月現在の蔵書冊数は、総数4万1216冊、内訳洋書3万2210冊、和漢書9006冊、としている。⁽⁹⁾

ここに記されているところの1921（大正10）年に購入した故 Pfeffer 教授旧蔵図書が Pfeffer 文庫である。また、1923年の中国での蒐集漢籍は、1965（昭和40）年に、岡山大学附属図書館農業生物研究所分館によって『大原漢籍文庫目録』が、『農学研究』第51巻第1・2号（創立五十周年記念）付録として刊行されている（別に1974年に『岡山大学所蔵近世庶民史料目録第3巻』に「四庫分類法」に従った新目録を収録）。この「目録」のまえがきには、上記兩名を中国に派遣し、漢書を蒐集せしめたのは「故大原孫三郎氏が、中国は元来農業国であり、当然農業に関する貴重な文献がある筈であるとの配慮の下」⁽¹⁰⁾であると、創設者大原孫三郎氏の発想によることを記してい

る。この「目録」まえがきには、「なお分館には大原漢籍文庫のほかにも、若干漢籍、本草書のあることを附記する⁽¹¹⁾」とあるが、ここに附記されたものが、この「大原農書文庫」である。

上掲引用文のように、Pfeffer 文庫、大原漢籍文庫については購入時期が記されているが、この農書についてはない。受け入れ状況を示す記録をみると、この農書文庫の受け入れ時期は1921（大正10）年以前4件・5冊、21年119件・713冊、21・22年58件・200冊、22年169件・686冊、22・23年49件・87冊、23年127件・285冊、23・24年1件・5冊、24年107件・244冊となっていて、1921（大正10）、22、23年という時期に最も集中している⁽¹²⁾。このように農書蒐集は農業図書館が設置された年とその直後であり、Pfeffer 文庫、大原漢籍文庫の蒐集と同一の時期である。その動機については記されていないが、農業の自然科学的研究において、わが国在来農学という伝統的歴史的背景とのかかわりを重視するという視点を推測することができよう。

3 大原農書文庫収集書物の概要

これらの図書は『大原農書文庫目録』では日本十進分類法に従って分類されている⁽¹³⁾。この基準にもとづく分類結果によると、それは、総記から文学までの総ての部門となり、多岐にわたるものとなる。このように多くの部門にわたるが、農業と関連のない部門のものも、農業との関連を連想させる標題のものが蒐集されているといえる。たとえば、9部門（文学）に分類されるものでも、「俳諧煙草集」（枕流亭一澄編、刊本、和装本・1冊、跋慶応1年）〔請求記号030—127〕、「華実年浪草」（12巻、鶴川龜文（三餘齋）著、刊本・文政6・河内屋茂兵衛、和製本・15冊、天明3年三餘齋蔵版）〔020—3〕、「これこれ草」（2巻、加藤正得著・加藤正修枝、刊本・梶田久光堂、和製本・2冊、序嘉永3年）〔170—121〕、「未開牡丹詩」（山路濟編、刊本・白雲桜蔵・鹿田静七、和製本・1冊、序安政3年）〔030—115〕というよう

に、煙草、草、牡丹という植物名を付したものであり、このようなことで蒐集しているのである。0部門（総記）の随筆は農学者によるものを主としており、1部門（哲学）の場合も倫理学・道徳も「報徳外記」（2巻，齊藤高行著，刊本・明治18年・東報徳社蔵・中川喜三郎，和装本・2冊）〔310—47〕，「衣食訓」（託静翁説・明道聞書，刊本，和装本・1冊）〔310—48〕，「教訓農商訓」（洛陽散人蒲原，刊本・寛政8年・藤屋善七，和装本・1冊）〔030—65〕，「民家分限記」（5巻，常盤良尚選述，刊本・安永6年再版・勝村文徳堂，和装本・1冊）〔946—2〕，「民家雑談」（刊本・天明3年・前川六左衛門，和装本・1冊）〔030—162〕や「菜根百事」（5巻，無荒逸土著，和装本・5冊）〔946—1〕，「治生草」（2巻，橘東洛著・加藤亀軒輔，刊本・天保8年，和装本・2冊）〔030—80〕など，菜・根など農に関するものを冠したもので，農民教訓のものである。このように，明らかに広義には農業書と関連するものとして蒐集されたものといえよう。もっとも，このように多岐にわたる蒐集であるが，やや雑然とした蒐集であるという印象をもつ。たとえば先にもあげた文学・日本文学として分類されるもののなかには，「俳諧煙草集」（前掲），「未開牡丹詩」（前掲），「青物詩選」（2巻，悟軒泥坊著・著六齊眠道枝，刊本・享和3年・佐々木惣四郎，和装本・1冊，序寛政12年）〔030—88〕などはそれぞれ俳諧，俳諧，狂詩であり，標題に植物名があるものを内容を吟味しないで蒐集しているように思われる。このように多部門にわたっているとはいえ，明らかに本草・農業に関するものが中心であって，ここに収斂する蒐書となっているのである。時代的には，この文庫のなかには，明治以降の刊行物もかなりの件数となり，広い時代にまたがっているが，近世期を中心としている。

このなかには漢籍の和刻本，漢籍そのものがかなりふくまれている。漢籍には，「農桑輯要」（7巻，可農可編，刊本・武英殿聚珍版，2冊，序乾隆38—1773—1年）〔350—15〕，「三農記」（24巻，張宗法師古甫著，刊本，8冊，序乾隆15—1750—1年）〔300—57〕，「二如亭羣芳譜」（王象普撰，刊本，

11冊、欠利部第5冊）〔030—196〕、「佩文齊広羣芳譜」（100巻・目録3巻、汪灝等奉勅撰、刊本、36冊、序康熙47—1708—年）〔030—38〕などの農書、植物に関する重要な書物があるが、それとともに漢籍の和刻本が少なくない。それらのなかには、「本草綱目」（52巻・序目1巻・附録4巻、李時珍撰、刊本・万治2年・武林錢衙蔵、和装本・35冊、附則本草項目図3巻・脈学奇経八脈1巻）〔030—5〕、「天工開物」（上1～6・中7～13・下14～18・全18巻、宋応星著・江田益英校訂、刊本・明和8年・河内屋茂八、和装本・9冊）〔030—107〕、「救荒本草」（上1～8・下9～14・全14巻、附録2巻、刊本享保1年・川勝七郎兵衛、和装本・6冊、附救荒野譜）〔170—6〕、「食物本草」（10巻、岱宗谷中虚撰・李杲編輯、錢允治校注、刊本・慶安4年・山屋治右衛門、和装本・2冊）〔030—63〕、「神農本経」（錢塘著、刊本・寛保3年、和装本）〔030—39〕、「秘伝花鑑」（6巻、陳湔子編・平賀先生校訂、刊本・文政12年、和装本・6冊）〔170—72〕など、多く使用された重要なものがある。

そして、これらの和刻本の刊行とともに、とくに本草学に関する書物が蒐集されている。「用藥須知」（正編5巻・後編4巻・続編3巻、刊本・正編享保11年・後編宝暦9年・続編安永5年・野田藤八、7冊（欠後編3巻）〔280—9〕、「食療正要」（4巻、刊本・明和6年・野田藤八、和装本・1冊）〔030—178〕、「怡顔齊梅品」（2巻、刊本・明治24年・安藤八左衛門、和装本・2冊）〔334—19〕、「怡顔齊椴品」（刊本・宝暦8年・安藤八左衛門、和装本・1冊）〔334—35〕、「怡顔齊蘭品」（2巻、刊本・明和9年・佐々木総四郎、和装本・2冊、跋延享3年）〔334—33〕などの松岡玄達のものをはじめとして、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」（48巻、小野蘭山述・小野職孝・岡村春益編、刊本・文化2年、和装本・13冊）〔030—54〕、同じく「本草綱目啓蒙」（35巻、小野蘭山口述・梯南洋補正、刊本・天保15年・学古館蔵、和装本・37冊）〔030—22〕、「本草綱目訳説」（52巻、小野蘭山述・石田熙編、写本、和装本・5冊—1～4巻欠）〔030—46〕、「花彙」（8

卷, 小野蘭山・島田充房共著, 刊本・草部宝暦9年・木部明和2年・文盛堂蔵・大略儀石衛門, 和装本・5冊) [170—15], 貝原益軒の「大和本草」(16巻・附録2巻・諸品図3巻, 貝原篤信著, 刊本・宝永6年・附録諸品図正徳5年・永田調兵衛蔵, 和装本・20冊) [030—31] などである。

4 大原農書文庫農書類の特徴

このように多岐にわたるとはいえ, 主体は以上の本草とともに近世期および明治期の農書である。その内容であるが, 近世期についていえば, 今日, この時期の農書の基本的と思われるものはかなり蒐集されている。最も体系的な, そしてわが国最初の刊行農書である宮崎安貞著の「農業全書」(10巻・付録1巻, 刊本・元禄10年・丸屋善兵衛, 和装本・11冊) [300—34] をはじめ大蔵永常, 佐藤信淵などのものが蒐集されている。大蔵永常のものは, 「農家益」(前編3巻・後編2巻・続編2巻, 刊本・享和2年・愛知園蔵・中川五兵衛, 和装本・1冊) [300—67], 「老農茶話」(刊本・明治19年翻刻・穴山篤太郎, 和装本・1冊) [300—124], 「農家肥培論」(3巻, 刊本・明治21年, 有隣堂, 和装本・1冊) [381—41], 「農具便利論」(3巻, 刊本・青木高山堂, 和装本・3冊, 序文政5年・跋明治10年) [391—12B], 「再種方」(刊本, 明治19年翻刻・穴山篤太郎, 和装本・1冊) [322—112], 「除蝗録」(刊本・文政9年・黄葉円蔵・角丸屋甚助, 和装本・1冊) [186—65], 「豊稼録」(刊本・文政9年・俵屋善次郎, 和装本) [322—87], 「製葛録」(有坂北馬画, 刊本・文政13年・河内屋長兵衛, 和装本・1冊), 「油菜録」(刊本・文政12年・黄葉円蔵, 和装本・1冊) [322—21], 「農稼業事」(2巻, 附録2巻・後編3巻, 児島如水編・後編大蔵永常編, 刊本・寛政5年・後編文政13年・文海堂蔵, 和装本・6冊) [300—85], 「綿圃要務」(2巻, 刊本・天保4年・富山房・文溪堂, 和装本・2冊) [300—39], 「国産考」(8巻, 刊本・河内屋真七, 和装本・8冊, 天保15年跋)

[300—73], 「徳用食鑑」(刊本・鶴屋喜右衛門, 和装本・1冊, 序天保4年) [384—22] などの13件を蒐集し, 明治期になってからの刊行の多い佐藤信淵のものは, 「草木六部耕種方法」(20巻, 刊本・明治9年・和泉屋善兵衛, 和装本・16冊) [300—58], 「農政本論」(3編9巻・序目1巻, 小田完之訂, 刊本〈明治期〉, 和装本・8冊, 序明治4年) [310—26] など15件を蒐集している。

また, 岡田明義著「無水岡田開闢法」(刊本・育民堂, 仮綴・1冊, 跋文久1年) [300—87] 〈秋田県〉, 加藤寛斉著「菜園温古録」(写本, 和装本・1冊, 序慶応2年) [300—98] 〈茨城県〉, 田村仁左衛門「農業自得」(2巻, 刊本・田村氏蔵, 和装本・2冊, 序天保12年) [300—135] 〈栃木県〉, 吉田友直著「開荒須知」(2巻, 写本・文化2年, 和装本・1冊) [313—47] 〈群馬県〉, 土屋又三郎著「耕稼春秋」(7巻, 写本, 和装本・7冊, 序宝永4年・跋享保4年) [300—62] 〈石川県〉, 児島如水著「農稼業事」(2巻・附録2巻・後編5巻, 後編大蔵永常編, 刊本・寛政5年・後編文政13年・文海堂蔵, 和装本・6冊) [300—35] 〈滋賀県と推定〉, 河合元著「穂に穂」(刊本・天明6年・河内屋和助, 和装本・1冊) [300—132] 〈岡山県〉, 小西篤好著「農業余話」(2巻, 刊本・文政11年・瑞錦堂丸屋善兵衛, 和装本・2冊) [300—66] 〈大阪府〉, 宮地簡撰「農家須知」(写本・慶応3年, 和装本・1冊, 跋天保11年) [322—90] 〈高知県〉などの地域ごとの特徴を濃厚に示す重要な農書なども蒐集されている。⁽¹⁴⁾

農書にあって相対的に独自性をもつ蚕書も, 塚田与右衛門著「新撰養蚕秘書」(刊本・宝暦7年・須原屋平左衛門, 和装本・1冊) [350—58], 上垣守国著「養蚕秘録」(3巻, 西村中和・速水春斉画, 刊本・享和3年・須原屋平左衛門, 和装本・1冊), 成田重兵衛著「蚕飼絹篩大成」の別名「養蚕絹篩」(2巻, 刊本・明治17年・有隣堂, 和装本・2冊, 別名「蚕飼絹篩大成」, 序文化10年) [350—28] など主要なものが蒐集されている。さらに, 最古の園芸書といわれる水野元勝著「花壇綱目」(松井頼母増補, 刊本・河内屋太助,

和装本・1冊；跋享保1年）〔334—25〕，内容的にみてわが国古典園芸書として価値の高いとされている伊藤伊兵衛著「花壇地錦抄」（6巻，刊本・中西卯兵衛，和装本・4冊，序文禄7年）〔334—50〕は5・6巻を欠くが，「地錦抄」（16巻〔増補地錦抄8巻・広益地錦抄8巻〕・附録3巻，刊本・増補宝永7年・広益享保4年・附録享保18年・須原屋茂兵衛，和装本・20冊）〔170—14〕があり，これらをはじめとする園芸（鑑賞植物）書を蒐集している。

以上あげたものは多く写本あるいは刊本で少なからず現存するものであり，あるいは明治以降に各種叢書などに収録，活字本として刊行されているものではあるが，農書のコレクションとしては欠かせないものである。

明治期のものでは，林遠里著「勸農新書」（2巻，刊本・明治14年・緑溪社蔵・右田喜八郎，和装本・1冊）〔322—131〕，中井太一郎著「大日本稲作用法」（2巻，刊本・中井益蔵，和装本・1冊，序明治29年）〔322—161〕，梅原寛重著「田圃驅虫実験録」（刊本・明治19年・有隣堂蔵・穴山篤太郎，和装本・1冊）〔186—149〕をはじめ，石川理紀之助，小柳津勝五郎，奈良専二などのいわゆる老農の手によるものがそれなりに蒐集されている。また，部門では工芸作物，果樹，養蚕，蕪菜，家畜へとひろがりを見せている。

5 大原農書文庫の特色ある農書

『国書総目録』⁽¹⁵⁾は国初以来慶応4（1868）年までのわが国作成書物を集大成したものである。この大原農書文庫のなかには，『国書総目録』に記載されていないものがある。それらのなかには，そこでの収録の対象外とされた地方史料の写本などもあるが，記載対象に相当すると思われるものでありながら，そこにみられないものもある。一例をあげれば，「本草綱目記聞」（52巻小野蘭山著，写本，和製本・7冊，欠1～4・26～52巻）〔030—21〕，「蘭山本草綱目訳定」（小野蘭山述，写本・向井易玄等，和装本・11冊）〔030—25〕

などである。地方史料としては、「備前地方民政秘鑑」（鳩谷恭正著，写本，弘化3年，和装本・13冊）〔310—63〕は，村役人としての立場からの村治マニュアルであって，「地方凡例録」の備前版ともいい得るものであり（本文庫中の「地方凡例録」は刊本・慶応2年・観古堂，和装本・11冊，〔030—39〕），このように，貴重なものがふくまれている。

ここには『国書総目録』に掲載されながらも，現物がないもの，あるいはその数の少ないものなどもいくつかある。『国書総目録』の記載によって現物の少ないというものをあげると，「往来田卷物之写」（写本・加茂季元，和装本・2冊）〔030—176〕は写本が一つ，「農兵論言」（菊池海莊著，文久2年，和装本・1冊）〔030—92〕は写本が一つ，「開廠賑粥法」（鎌倉石見著，刊本，和装本・1冊）〔030—140〕は刊本が一つ，「大寫窺覧」（写本，仮綴・1冊）〔300—378〕は「大寫見聞録」として写本が一つ，「開荒須知」（吉田友直著，写本，文化2年，和装本・1冊）〔313—47〕，「桑仕立方」（刊本，和装本・1冊）〔350—24〕は写本が一つ，「綿羊訳説」（馬場貞由・大槻茂質訳，写本，和装本・1冊）〔340—35〕は写本が一つ，「漁村維持法」（佐藤信季著・佐藤信淵校，写本，安永9年，佐藤庄九郎，和装本・1冊）〔310—44〕は稿本が一つ，だけというものである。また，「勸農固本録」，「地方落穂集」などを合本した「地方道元集」（5巻，写本・吉沢莫美，和装本・4冊，臥治撮要・勸農固本録・郷村録・耕録・地方落穂集）〔310—42〕に収録されている「臥治撮要」（天保5年写）は写本が一つあるのみである。『国書総目録』の記載において，二つのみ，あるいは三つのみというものはさらに多くある。

『国書総目録』に掲載されながらも現物がないとされてきたものもいくつかある。「地方明弁大成」（石原清左衛門著，写本，和装本・2冊）〔310—252〕は，『国書総目録』には「弘化四？『国書解題』による⁽¹⁰⁾と記されているが，『国書解題』に記載があるということで掲載されているもので，現物の所在は記されていない。本文庫のものが唯一のものである。「伊奈郷農事

録」(陶山存著, 写本, 弘化4年, 和装本・1冊) [300—196] は、『国書総目録』には「著者, 陶山鈍翁, 享保一一」で所在は活字本『日本経済叢書 第四卷』, 『日本経済大典 第七卷』に収録されている活字本のみである。これも本文庫のものは唯一の現物写本である。

「菜園温古録」(加藤寛斎著, 写本, 和装本・1冊, 序慶応2年) [300—98] も現時点での唯一のものとして確認できるものの著例である。『国書総目録』には, 「㊤旧彰考・小野武夫 ㊦日本農民史料聚粹⁽¹⁷⁾」となっている。この水戸藩北部を対象とする農書は近時に『日本農書全集 第3巻』(1979年)に翻刻されているが, 底本には小野武夫編『日本農民史料聚粹 第9巻』(1942年)所収のものが用いられている。その解説にはつぎのように記されている。「水戸藩手代の草稿である。現在, この草稿は所在が不明である。大正七年(一九一八)の『彰考館図書目録』には, たしかに『菜園温古録 一(冊)写』の一行を読むことができるので, 戦前に写本が彰考館文庫に架蔵されていたことは確実である。現在の彰考館にはこの一本は所蔵されていないので, 戦災により焼失されたものと考えられる」, したがって現在のところ, 閲読できるのは前掲の小野翻刻本に限られる。しかも原書は加藤寛斎手記の草稿で, 織田完之が茨城県巡回中河井貞一より借写したものである。もともとは農商務省文庫保管のものから転写したものという。農商務省文庫は震災で焼失したので, 織田の借写した寛斎自筆の草稿であるかどうかは調べる手立てもない。⁽¹⁸⁾ 本大原農書のもは現存する唯一の写本であり, きわめて貴重である。

『国書総目録』の刊行は1960(昭和35)年であり, また所蔵機関調査対象を限定しているなどのことがあることなどにより, あるいは必ずしも十全ではなく, これらあるいは他にも存在しており, またそれが確認されているかもしれない。しかしこれらはともあれ現段階では確認できる唯一の現物である。

この大原農書文庫のものは, これまでに, 翻刻の底本などとして使用され

てきている。筆者の知るところでも、『明治中期産業運動資料 第一集農事調査 第6巻』⁽¹⁹⁾の印影版「福井県農事調査書」は東京大学経済学部所蔵のものを本文庫のもので補ったものであり、筆者は、本文庫のものをもってその解題を記した。また、最近の『日本農書全集 第29巻』⁽²⁰⁾収録の「穂に穂」の翻刻・解題にも本文庫のものが比較対照の一つとされている。これからも研究の資料として、あるいは刊行の底本などとして、多く活用されていくものである。

6 大原農業研究所における図書収集の意義

大原農業研究所の研究の中心は種芸部、農芸化学部、植物病理部、昆虫部の4部門を主体とするものであった。自然科学的研究であり、輝かしい成果をあげ、名声を博した。その研究を推進するためには、最新の研究成果・動向の蒐集こそ、文献蒐集においてはなににもまして重要なことであり、内外の多くの雑誌・報告書類を蒐集し、関連文献を蒐集している。しかし、それとともに、漢籍、近世農書が蒐集されて、大原農業研究所は農業・本草学に関する漢籍と農書のコレクションを所蔵するところとなった。そして岡山大学はこのような貴重なコレクションをひきつぐことができた。なお、そもそも財団の運営は、大原孫三郎の寄附による100町歩の小作地の小作料によってまかなわれていたが、図書購入の費用は、特殊な機械器具の購入とともに大原孫三郎による特別寄附金によってまかなわれている。図書購入費は、大正11(1922)年3万円、12年1万3千円、13年1万1千円という大きさであった。⁽²¹⁾財団の運営経費は、大正3年から5年頃は2万円内外であったが、米価の騰貴により増大し、大正8(1919)~13年頃は年間5万円であった。この経常費は4ないし5部門の研究所としては他の公共農事試験機関と比較してかなり多額であったという。⁽²²⁾このような他の研究機関と比較してかなり多額になる運営費との比較でみると、図書購入費の大きさは明瞭である。そ

して、研究に直接資する自然科学的な内外の雑誌・報告書類、関連文献とともに、このように漢籍、農書をも蒐集しているところに、この一民間研究所の農業科学研究における構想の大きさと豊かさをみる思いがする。

註

- (1) 「国立総合大学岡山設置計画書」中国総合大学設立期成会 1～4 ページ。
 - (2) 前掲「国立総合大学岡山設置計画書」12ページ。
 - (3) 西門義一編『財団法人大原農業研究所史』（1961年 大原奨農会）発刊のことば。
 - (4) 前掲『財団法人大原農業研究所』6～47ページ。
 - (5) 『岡山大学二十年史』（1969年）545ページ。
 - (6) 前掲『岡山大学二十年史』546ページ。
 - (7) 『岡山大学所蔵 大原農書文庫・古医書集成目録』1987年 岡山大学附属図書館。
 - (8) 前掲『財団法人大原農業研究所』45ページ。
 - (9) 『財団法人大原奨農会要覧』1926年 18ページ。
 - (10) 岡山大学附属図書館農業生物研究所分館『大原漢籍文庫目録』（『農学研究』第51巻第12号（創立五十周年記念）附録 1965年）まえがき。
 - (11) 前掲『大原漢籍文庫目録』まえがき。
 - (12) 大原農業図書館「受入簿」（『岡山大学附属図書館資源生物研究所』所蔵）。
 - (13) ころもりに各部門ごとの件数（タイトル数）・冊数はつぎのごとくである。
- | | | | |
|-------|-----|------|-------------------|
| 総記 | 14件 | 199冊 | |
| 哲学 | 17 | 47 | |
| 歴史 | 16 | 58 | |
| 社会科学 | 38 | 142 | |
| 自然科学 | 161 | 905 | （うち本草学 123件，766冊） |
| 工学・技術 | 40 | 85 | |
| 産業 | 452 | 1026 | |
| 芸術 | 7 | 11 | |
| 語学 | 14 | 62 | |
| 文学 | 14 | 42 | |
| 合計 | 773 | 2577 | |
- (14) 〈 〉内は農書成立の場所を現在の府県で示す（佐藤常雄「地域別・主要農書一覧」〔古島敏雄編著『農書の時代』1980年 農山漁村文化協会〕による）。
 - (15) 『国書総目録』は、全8巻と著者別索引の全9冊で、1963～72年（第1巻～第8巻）、1981年（索引）に刊行されている（岩波書店）。最近改訂版が刊行されつつあるが、ここでは初版によっている。
 - (16) 『国書総目録 第四巻』（1966年）21～22ページ。

- (17) 『国書総目録 第三巻』(1965年) 629ページ。
- (18) 『日本農書全集 第3巻』(1979年 農山漁村文化協会) 383～386ページ。
- (19) 『明治中期産業運動資料 第一集農事調査 第6巻』(1979年 日本経済評論社)に収録。
- (20) 『日本農書全集 第29巻』(1982年 農山漁村文化協会) 3～91ページに収録。佐藤常雄氏による詳細な解題92～116ページ。
- (21) 前掲『財団法人大原農業研究所史』45ページ。
- (22) 前掲『財団法人大原農業研究所史』12～13ページ。